新潟青陵大学短期大学部

入学試験問題集

2023-2025

Contents

■ 2025 年度 小論文問題　P.1

■ 2024 年度 小論文問題　P.4

■ 2023 年度 小論文問題　P.7

※解答例は掲載していませんのでご了承ください。

「生きる」を支える。「笑顔」をつくる。
NIIGATA SEIRYO
新潟青陵大学短期大学部

2025年度
新潟青陵大学短期大学部入学試験
「学校推薦型選抜」「特別選抜試験」「学園内特別推薦入試」
小論文問題

試験の受け方について

1　試験開始の合図があるまでは、この問題用紙には手を触れないでください。
2　解答はすべて解答用紙に記入してください。
3　試験時間は90分です。
4　印刷が不明瞭な場合のほかは、問題について質問は受けません。
5　試験終了時に解答用紙を提出してください。
6　試験終了時に問題用紙と下書き用紙はお持ち帰りください。
7　不正な行為があった場合は、解答はすべて無効となります。

二〇二五年度　新潟青陵大学短期大学部入学試験

「学校推薦型選抜」「特別選抜試験」「学園内特別推薦入試」小論文問題

次の文章は女優・歌手である上白石萌音のものである。これを読んで問いに答えなさい。

問一　この文章の要旨を三十字以内でまとめなさい（句読点を含む）。

問二　この文章についてのあなたの意見を五百字以上六百字以内で論じなさい（表記は原稿用紙の使い方に準ずる）。

低い机に日本地図が広げられている。

「萌音が今いる鹿児島はここ。大きくまとめてこれが九州。上から県の名前を読んでごらん」

「ふくおか、おおぶん」

「それはおおいた」

「おおいた？　なんでおおぶんって書いておおいたって読むの？」

これは祖父と幼いわたしの会話。覚えている限り一番古い「学び」の記憶だ。幼稚園児くらいだっただろうか。最後の問いに祖父がなんと答えたかは忘れてしまったけれど、すごく不思議に思ったことは覚えている。

祖父母の家に泊まりに行くといつも、いろんなことを教えてもらっていた。

もう一つ、これは小学生くらいの時。

「もう遅いから寝なさい。宿題も明日起きてからやらんね。あのね、朝起きて一番に書く字が、一番綺麗なのよ」

こう教えてくれたのは祖母。妙に納得して、すぐに眠りについた。翌朝書いた字は、本当に昨晩の字とは見違えるほど綺麗に見えた。

ずいぶん時間が経って、わたしも大人と言える年齢になってきたけれど、「大分」の文字を見るたびに祖父との時間を思い出すし、大切な書き物は朝一番にすると決めている。あの時の教えが染みついている。

他にも、母に教わった譜面の読み方、父とお風呂場で暗唱した『枕草子』など、忘れられない学びの体験が多い。わたしの周りにはいい先生がたくさんいたのだな。なんでも知りたくてなんでも不思議だったあの頃、「学びたい」という欲求に応えてくれる大人がいつも近くにいた。とても恵まれていたし、だから学ぶことが好きになったのだと思う。

よくよく考えてみると、歩き方も食べ方も歯の磨き方もドライヤーの使い方も、全部誰かから学んだことだ。物事の善し悪しも、周りの人たちを見て判断している。生きることは学ぶことで、日々は学びの結晶だ。

「一生学びなさい」と父がよく話す。どんなに年を重ねても、不思議なことに対する違和感を大切に、子どものように柔らかく吸収しながら生きていきたい。

上白石萌音『いろいろ』（ＮＨＫ出版）より

二〇二五年度　新潟青陵大学短期大学部入学試験

「学校推薦型選抜」「特別選抜試験」「学園内特別推薦入試」

小論文　解答用紙

一　この問題文の要旨を三十字以内でまとめなさい（句読点を含む）。

二　この問題文についてのあなたの意見を五百字以内で論じなさい（表記は原稿用紙の使い方に準ずる）。

受験番号	
氏名	

600　500　400　300　200　100

2024年度
新潟青陵大学短期大学部入学試験
「学校推薦型選抜」「特別選抜試験」「学園内特別推薦入試」
小論文問題

試験の受け方について

1　試験開始の合図があるまでは、この問題用紙には手を触れないでください。
2　解答はすべて解答用紙に記入してください。
3　試験時間は90分です。
4　印刷が不明瞭な場合のほかは、問題について質問は受けません。
5　試験終了時に解答用紙を提出してください。
6　試験終了時に問題用紙と下書き用紙はお持ち帰りください。
7　不正な行為があった場合は、解答はすべて無効となります。

二〇二四年度　新潟青陵大学短期大学部入学試験
「学校推薦型選抜」「特別選抜試験」「学園内特別推薦入試」小論文問題

次の文章を読んで問いに答えなさい（設問の都合上、一部を改編している）。

一　問題文の要旨を三十字以内でまとめなさい（句読点を含む）。

二　問題文についてのあなたの意見を五百字以上六百字以内で論じなさい（表記は原稿用紙の使い方に準ずる）。

散歩は、ちょっとした冒険だ。初めて訪れる町はもちろんだけど、何年も住んでる家の近所だってそう。坂道の先、曲がり角の先がどうなってるかは実際にそこに行ってみないと分からなくて、気まぐれにひょいと路地に潜りこめば全然知らない景色、住宅街の中に描画バグみたいに埋め込まれた保全緑地、なぜか「河本」という姓だけやたらと多いお墓、ぴかぴか光るガラクタに囲まれた怪しい一軒家、家の隙間を縫って町内一帯を見渡せる小高い石階段。観光地でもフォトスポットでもないそういう景色、もしも一本隣の路地を選んでいたら出会えなかったそういう景色に、紙一重で出会ったり出会わなかったりする体験の連続が、散歩の醍醐味だ。

ボイジャーという探査機がやったのも、そういう冒険だった。数百年に一度、木星・土星・天王星・海王星がちょうどきれいに並ぶタイミングを利用して、僕らの住む太陽系内の惑星を順番に訪問してやろうという散歩計画だった。

（中略）

遠くから眺めているだけでは絶対に見られなかった数々の景色、宇宙探査技術が急成長を遂げていたあの時期に、ちょうどあの奇跡的な天体配置が起こらなければ出会えなかった景色、そういうものをボイジャーは見た。それはやっぱり紙一重の体験だった。もしもほんの少し歴史の流れが違ってたりなんかしたら、あの歴史的な太陽系内散歩は実現できてなかったかもしれない。

ボイジャー1号・2号は１９７７年に打ち上げられて今も地球と通信し続けているけれど、どちらもついに２０２５年ぐらいには電池の寿命が尽きてしまうらしい。電池が切れた後はもう一生地球とおしゃべりすることはできなくなってしまって、地球に戻ってくることもできなくて、ひたすら何もない宇宙空間を飛び続けることになる。一応、万が一宇宙人たちに拾ってもらえた時のために、人類の存在を伝える金ピカのレコードを持ってたりはするけれど、今世紀中とか近い将来に見つけてもらえる可能性はかなり低い。誰とも話せない、誰にも会えない、何百年、何千年もの長い時間が、この先もボイジャーを待っている。なんともおそろしい孤独。

僕が散歩を好きなのは、それが少しおそろしい体験でもあるからだと思う。見慣れた景色を一歩抜け出せば、知らない誰かの知らない家。そしてその裏にある日々の生活。誰かにとってかけがえのない誰かとの人間関係。そういう無数の人生に取り囲まれると、自分という存在もこの広大な世界の中の繰り返しの一つに過ぎない気がしてくるから、たまにそういうことを確認したくなる。孤独で、心細くて、おそろしくて、だけどちょっぴり刺激的だから、たまにのぞいてみたくなる。

そして、なぜだか知らないけど、その時決まって僕は、愛のことを思ってしまう。突然思い出したように、何かを無性に愛したくなってしまう。自分の住むこの町を大切にしたいとか、この場所のこの角度から見たこの光景を自分の好きな人と共有したいとか、自分のことを好きでいてくれる人とまたこの場所をこの時間に歩きたいとか、急にそういうことを願い始めてしまう。孤独はなぜかいつも愛を連れてくる。おそろしさと温かさと、そういうものがごちゃ混ぜになるところが、散歩の良いところだ。

ボイジャー1号の散歩中、60億キロメートルの彼方から撮った地球を見て、同じように愛のことを思った人がいた。画素にして1ピクセルにも満たない点としてかすかに映り込んだ僕らの地球が、いかに宇宙の中でかけがえのないものかを説いた人がいた。画面上のゴミと見間違うぐらいのそのちっぽけな地球の姿は、「Pale Blue Dot（薄暗くて青い点）」と呼ばれた。ボイジャーの無限のような孤独に見合う、大きな大きな愛だった。

もう一度、あの点を見てほしい。そこに現にあり、私たちのふるさとであり、私たちそのものであるあの点を。
あなたの愛する人も、あなたの知っている人も、あなたが伝え聞いたことのある人も、そして、かつてそこにいたすべての人も、みな、そこで人生を送ったのである。（中略）お互いをもっと大切に扱うこと、そして、私たちが知っている唯一のふるさとであるこの「暗い青い点」を守り育んでいくこと、それは私たちの責任であることを、この写真が強く訴えているように、私には思える。（カール・セーガン『惑星へ〈上〉』）

久保勇貴『ワンルームから宇宙をのぞく』（太田出版）より

二〇二四年度　新潟青陵大学短期大学部入学試験

「学校推薦型選抜」「特別選抜試験」「学園内特別推薦入試」

小論文　解答用紙

一　問題文の要旨を三十字以内でまとめなさい（句読点を含む）。

二　問題文についてのあなたの意見を五百字以内で論じなさい（表記は原稿用紙の使い方に準ずる）。

受験番号	
氏名	

600　500　400　300　200　100

2023 年度
新潟青陵大学短期大学部
学校推薦型選抜・特別選抜試験・学園内特別推薦入試試験問題
「小論文」

試験の受け方について

1　試験開始の合図があるまでは、この問題用紙には手を触れないでください。
2　解答はすべて解答用紙に記入してください。
3　試験時間は 90 分です。
4　印刷が不明瞭な場合のほかは、問題について質問は受けません。
5　試験終了時に解答用紙を提出してください。
6　試験終了時に問題用紙と下書き用紙はお持ち帰りください。
7　不正な行為があった場合は、解答はすべて無効となります。

二〇二三年度　新潟青陵大学短期大学部　学校推薦型選抜　小論文　問題

この問題文は、中学三年生の時に親の転勤でインドのインターナショナル・スクールに入学した筆者が、ラトゥナという転入生が自分の褐色の肌に対して「居心地悪い」と発言したことについて書いたものである。

一　問題文の要旨を三十字以内でまとめなさい（句読点を含む）。

二　問題文についてのあなたの意見を五百字以上六百字以内で論じなさい（表記は原稿用紙の使い方に準ずる）。

日本の中学の陸上部時代、毎日練習前には必ず日焼け止めを塗りたくっていた。特に炎天下で汗だくになる練習の日には一度塗りでは済まない。部員同士で貸し借りもしながら、数種類の日焼け止めを、念には念をと思いながら何層にも重ねていた。少しでも焼けてしまったときには「うわ〜、最悪……」とひどく後悔した。

陸上部員なら日焼けしないなんて無理だ、と簡単にあきらめられなかったのは、中学生ながらにして身につけてしまった、むしろ吸収してしまった、「白い肌への執着」が原因だ。

ドラッグストアに行けば広い日焼け止めコーナーがあり、「これで日焼けもこわくない」「絶対に焼かないために」と蛍光色で彩られたポップが掲げられていた。まるで日焼けが恐ろしいものかのように。雑誌の表紙には、「理想の白肌美人への5ステップ」などという見出しが、マシュマロのように白い肌のモデルさんのアップ写真の横で躍っていた。動画サイトを開けば、肌が白くなったというビフォーアフターの写真とともに、「肌を白くする方法」とデカデカとしたフォントで記されたサムネイルの動画が、数百万回も再生されていた。

そうして、日々さまざまな場所で巧みに練られたことばたちに囲まれて、いつの間にか「白さが絶対」という価値観が染みついていた。現に、インドに引っ越すときには大量の日焼け止めを買い込んで、わざわざ日本から持ってきた。「インドに行って黒くなったらどうしよう」と思っていた。

その結果、インターに来てみたら「白人」であるはずのアメリカ人やヨーロッパ人よりも、アジア人の自分や、似たような価値観の渦中で生きてきたらしい韓国人のほうが「白い」という皮肉な事実に直面した。

白い肌＝女子力。白い肌＝かわいい。それが（特に学生や若い世代のあいだで）暗黙の了解になりすぎていて、そのゴールに近づくことで、わたしは「心地良さ」を手に入れようとしてきたのかもしれない。

でも、考えてみれば不思議だ。だいたい、「美白」ということばがあって、なぜ「美黒」がないのか。なぜ「みんなの理想」を象徴するアイドルは、日焼けしてはいけないのか。なぜ白い肌だけが「みんなの理想」として自動設定されているのだろうか。そしてなぜ、その脳内の設定を解除するのはこんなにも難しいのだろうか。

明るい肌色の贔屓（ひいき）、そして暗い肌色をネガティブにとらえる「カラーリズム」。このことばを日本で聞いたことはなかった。けれど、知らぬ間に自分も似たような引力に影響されてきたのかもしれない。

白い肌を目指すこと自体が悪いことなのではないんだろうけど、それを絶対的な「かわいさ」「美しさ」（ましてや「偉さ」）のものさしだと思うようになってしまったら。まわりのひとのことも、そのものさしで測るようになってしまったら。そして、それが社会全体のものさしになってしまったら……。

大げさにとらえすぎだろうか。けれど、ラトゥナの悩みを知ってしまってからというもの、気づかぬ間に社会に投影されてきた「基準」がもつ刃の鋭さが、こわくなってしまった。自分自身も、そんな社会の一端であり、無意識にその刃を研いでいるかもしれないということも。

肌色が暗いというラトゥナがかわいそうなわけでは決してない。が、彼女の肌にはあってわたしやほかの誰の肌にもない美しさを、彼女自身が「美しい」と呼べないのは苦しい。春の息吹のようなやさしさと、燦然（さんぜん）とした太陽のエネルギーの両方を帯びたラトゥナの肌を、わたしは心からきれいだなと思うからだ。

ラトゥナに限らず、わたしも、誰も、自分の生まれた肌色を心地良いと思えたらな。

だって「はだいろ」なんて色鉛筆のあの一色だけではないのだから。そして「はだいろ」だけで、その皮膚の下に眠る心のあたたかさが決まるなんてことは絶対にないはずだ。どんな色鉛筆や絵の具を組み合わせてもかたちにすることもできないような、目に見える色なんてものだけでは表しきれないような、彩り。それこそがひとりひとりの心であって、肌色のちがうラトゥナとわたしの友情をつないでくれたものなんじゃないのかな。

インドという異国の地で、いざ自分が端からまわりとまったくちがうという状況に放り込まれてみて、自分がいままでどれだけ周りとの「ちがい」に過敏だったか、そしてそれを恐れてきたかを思い知らされた気がした。

だけど、本来「ちがい」は許されるべきものではなくて尊重するべきものだという理解が、「みんなちがってみんないい」ということばの真の重みでありあたたかみなんじゃないのかな。

熊谷はるか『ＪＫ、インドで常識ぶっ壊される』（河出書房新社）より

二〇二三年度　新潟青陵大学短期大学部入学試験

「学校推薦型選抜」「特別選抜試験」「学園内特別推薦入試」

小論文　解答用紙

一　問題文の要旨を三十字以内でまとめなさい（句読点を含む）。

二　問題文についてのあなたの意見を五百字以内で論じなさい（表記は原稿用紙の使い方に準ずる）。

受験番号	
氏名	

600　500　400　300　200　100